

第4号 華山会報

平成12年4月11日
財団法人華山会



華山から華山へ

東京大学文学部教授

河野元昭

渡辺華山先生ははじめ「華山」と号し、三十五歳のときから「華山」を用いるようになった。その間に両者併用の時期もあったが、三十五歳以後はもっぱら華山と款するようになった。華山は中国の五岳の一つである。五岳とは東岳の泰山、西岳の華山、南岳の衡山、北岳の恒山、中岳の嵩山をいう。華山という山はこの五岳のほかになのであるから、先生の号華山がこれから採られたものであることは、改めて指摘するまでもないであろう。一方『大漢和辞典』に華山の項を引くと、六つの華山が挙げられているのだが、その一つは「五嶽の西嶽」つまり華山のこととなっている。華山は華山と書かれる場合も多かったらしい。そうだとすると、先生がはじめ華山と号したときも、やはり五岳の華山が意識されていたことになる。先生は同じ山を心に描きながら、華から華へと変えたわけだが、それは字の問題に止まるものではなかったように思われる。

花と同音同義の華から、山水自然を思い起こさせる華への改号は、移ろいゆくものから動かざるものへ、先生の思想がさらに深まっていったことを意味するのではないだろうか。華は虚飾を、山は正しいことを表わす漢字でもあるのだ。それは表相から本質への深化であった。先生は孔子の言葉「仁者は山を樂しむ」を理想の境地とするようになっていたにちがいない。

これを先生の絵画芸術に当てはめて考えることもできるだろう。華にはいろどり、はやか、あでやかななどの意味があり、華山はそのような花の咲く山の表象となる。事実、江蘇省呉県の西にある華山は山頂に池があり、そこに咲き乱れる蓮の花から名づけられたのであった。一方、東西南北に青白朱黒の四色を当てはめる五行説にしたがえば、西方を象徴する華山は白色のイメージと分かちがたく結びついていった。つまり、華やかな色彩の裝飾的傾向から、東洋人にとって、対象の本質や自己の心情の表現によりふさわしいモノクローム的世界への昇華を意味するものであった。絵を描くとき一番最後に素（胡粉）で仕上げをするところから、絵画のことを後素というように、白色はもつとも重要な色であったのだが、それも西岳華山の表象とよく馴染むものであった。そして何よりも、意匠に人物花禽蟲魚は古今皆写真なり、山水も古は其通りにて、五岳四流の図なり」と信ずる先生にとって、いくつもの山が含まれる華山より、ただ一つの山に限定される華山の方が、自己の絵画観をよりの確に表明するものであったにちがいないのである。



田原城門前

華山三部作

田原町立田原中部小学校長
瓜生 堅吉

本校では、毎年の学芸会で、華山に関する劇と舞踊を上演しています。劇は「板橋の別れ」と「立志」で、舞踊は「花と茨」です。最近では、これを称して華山三部作と呼んでいます。

しかし、華山劇が創作された頃の華山三部作は、昭和二年に伊奈森太郎脚色の「立志」（日本橋の打擲ちようちやく）編と、その後追加された「忠節」編、昭和十年頃、田原技芸学校の安食博道脚色、夏目愛子作曲の「板橋の別れ」編でした。昭和二年の作品は、本校講堂竣工記念として同年九月二十六日、二十七日の両日、午後一時と午後七時の昼夜二回に分けて、落成記念大学芸演習会の中で上演されました。

「板橋の別れ」は、昭和九年八月に現在の旧校舎が落成されたことを

記念して、その年の三月の学芸会で上演されました。「忠節」編は歌唱が伴わず、ほとんど上演されていませんが、他の二編は、創作当時から同時あるいは交互に上演されてきました。

戦後は、「板橋の別れ」のみが上演され、華山劇の異名となっていました。昭和五十五年三月に、現在の体育館が竣工されたのを記念して、昭和五十六年度から「立志」も復活上演されるようになりました。



「板橋の別れ」



「立志」

舞踊「花と茨」は、華山生誕二百年祭が行われた平成五年に、地域の舞踊愛好家の誘いを受けて、豊橋のてまり会の師範北岡豊悠穂先生の振付によって誕生し、現在に至っています。

なお、「板橋の別れ」には二年と五年の子、「立志」には三年と六年の子、「花と茨」には六年の子がそれぞれ出演担当することになっています。

目次

P	田原町博物館からご案内
P	中部小学校児童
P	華山先生について
P	華山・まなびの原点
P	渡 家の家紋と家系
P	紀行文『游相日記』(2)
P	(神奈川県綾瀬市)
P	小園村
P	華山が見た田原 (1)
P	華山史跡
P	田原町博物館所蔵品から
P	華山先生略伝補 (3)
P	重文『干公高門図』
P	画家渡辺華山の心象
P	目次
P	田原町立田原中部小学校長
P	河野元昭
P	華山から華山へ
P	小澤耕一
	題字「華山会報」華山会理事

画家渡辺華山の心象

重要文化財 于公高門図

天保十二年（一八四一）絹本着色

縦一五八・〇cm 横五一・〇cm

個人蔵

款識には、隷書で「于公高門図邊伯登製」、印に朱文小瓢印の「登」と白文小長方印の「鷗保」を使用しています。



于公高門という故事は、前漢の歴史を記した『前漢書』卷七十一にあります。その内容は「獄吏であつた于定国の父于公は、裁判をする際に公平で、人々から尊敬されていた。ある時、于公の家の門が壊れてしまひ、新築することになつた。そこで、門を四頭立ての馬車を通ることができるとの噂が流れた。そこで、命じ、その門が完成し、子の定国の代になると、宰相になり、孫の代まで家は繁栄した」というものです。この説話を、華山が蛭社の獄で捕

らえられた際、公正な裁きをした北町奉行所の与力中島嘉右衛門へ贈るため、田原蟄居中の天保十二年に描いたものです。同年八月三十日付の椿椿山宛の書簡に「…于公高門図にて隙（ひま）入、不及本意候。…」とあり、于公高門図を完成させるのに時間がかかっていることを伝えています。画面の右下で手を上げているのが于公で、近景に樹木と建物の屋根を配置し、鳥瞰的な構図に仕上げ、中景の高門越しに見える建材を積み込んだ船と門の内側にある意図

的に高さを強調したような松が画面としての遠近感を巧みに構成しています。遠景に配した大きな岩はその背後の画面の奥行きをより強調するものです。約一六〇センチという華山の掛幅としては大きな縦長の構図に横五〇センチというバランスを使用していることも遠近感と広がりにより効果的に演出しています。

田原町博物館学芸員

鈴木利昌

華山先生略伝補 (3)

第十話 華山と長英

高野長英は奥州陸奥の人であります。幼い時に長崎の異人館に入り、才智が優れているということで、ドイツ人のシーボルト氏に雇われ、通訳及び西洋の書物を読むことを知り、たいへんシーボルト氏に可愛がられました。その後、事件が起こって、シーボルト氏は幕府より追放せられて本国に帰りました。

その変動の難を避け、出奔して江戸に出て医者としての仕事をしていました。しかしながら、当時は西洋の医術は世間で用いられることはたいへん稀であって、長英は生活に困窮していました。たまたまある日先生にお会いして以来、西洋の書物を訳読するということまでで親しい交友となりました。長英は麹町隼町に住み、私の邸と近いということで、毎日のようにやって来て阿蘭の書物を訳読し、先生は大いに為になることを得ました。長英もまた、著すところの『夢物語』は、先生が筆を加え

た所が多いということでありました。長英は、才識は不凡であります。性質は気短かで度量が狭く、老母に従順ではありませんでした。先生は、深くこのことを心配して、しばしばそれとなく諫めて、遂に孝行を尽くす人になったと言ったことです。中島源之助がこのことを話しました。

第十一話 蛮社の獄

そもそも、先生が思いがけない災いに遭遇された因縁を探ってみると、天保年間に、世間にしきりに外冠の風説が起り、且つ又オランダ人が密告していました。近年、アメリカの軍艦が江戸近海にやって来て、貿易を迫る動きがあると。このことによつて、幕府に攘夷の動きが高まり、沿岸の防備を嚴重にし、相模、伊豆や房総の沿岸防備のための大砲台を建築するという動きがありました。それで、幕府の役人を使いその沿岸の地形や要害の場所を巡検させよという命令が出されました。この時、監察(目付役)であった鳥井要蔵という人がその任にあたり、武蔵、相模、伊豆の海浜を巡検し、たまたま伊豆の葦山の代官江川太郎左衛門に出会つて、沿岸防備の利害について討論をしました。要蔵は、もとより江川氏を侮り、片田舎の人が何の知ることがあるうかと、みずから

の弁舌で以て海防の奇策を誇ろつとしていました。しかるに、予想に反して江川氏は、海外の事情に精通していて、鳥井氏が未だ知らない説にまで及び、鳥井氏は口を開くことも出来ませんでした。ほとんど下役の役人や傍にいた人々にもその面目を失つてしまいました。このことによつて、鳥井氏は悪い計画を抱き、江川氏を罪に陥れようと謀つたのであります。

これより先、江川氏はもとより武術を嗜んでおりました。その傍ら絵画を善くしていました。それ故に、華山先生の名望を聞き江戸にやって来て、たびたび出合いを重ねて、その友好の情を厚くし、海外の事情や形勢または防備についての策を議論することがありました。

鳥井氏は、密かにそのことを聞き及び、華山を捕らえて詰問すれば、海防の自分の秘策で必ず江川氏を挫折させることができるだろうと。そこで配下の徒士である目付の花井虎蔵という者を使い、度々華山を訪問させ、海外の談論や無人島の形勢、開港等の個人的な論議をスパイさせ、これによつて江川氏を陥れる一策を思ふ存分練り上げて、幕府の閣僚に逮捕を促したのであります。

これによつて、閣僚たちは、その訴えを信じて、遂に華山を捕らえて、即日町奉行より与力同心組に命じ、先生の家の中の書物や記録や書簡や札等

ことごとく收拾して、幕府に没収してしまいました。

しかしながら、捜査中、江川氏に関する個人的な議論を以て、ただ駄舌小記、慎機論などの著論に当時の禁忌にわたる私論があるのを以て、罪に服させるといふことは、もとより先生の無実の罪であつて、要威が悪巧みし、間違いを犯したものであります。



蛮社の獄

第十二話 自刃の原因

先生を自刃に追い詰めたその訳は田原藩の中の邪なことを企む者のしたところであつて、先生が高名で信望があり且つまた藩政を執るに公明正大であるのをもつて、悪いことを思う存分にすることができず、常に先生が躓き倒れることを密かにこい願つておりました。それ故に、先生が突然に拘留され取り調べを受けることになつた際には、この者たちは密かに喜びあたかも雲や霧が取り払われたような思いをしました。然るに、先生が放免となつて国（田原）に帰り蟄居となつた時といへども、志有る者は常に先生の廬を訪問し、世の経史を論じ、藩政の事務を相談しました。（真木氏・松岡氏・村上氏等）

又、近隣の村人は画を求める者が多く、門前を行き来し外の人の出入りが絶えることがありませんでした。ここにおいて、邪なことを企む者と頑な愚か者たちが嫉妬心を起こして云いました。先生は謹慎中にもかかわらずこのように外の人との交流があるのは公を畏れないからだと思はして、都にいる心のねじけた某にこれを告げました。その人は当時主家の公務を管理する者でありました。その役を「推し合（奏者押合役）」と云います。

「ここにおいて、心のねじけた某は、清らかなことを疎かにしてけがすような策を作つてうそを云つて、

「近ごろの渡邊氏の行状には公を畏れないものがあり罪にあたる。この事が既に官吏の耳にも聞かえてゐる。恐らくは近日中に再び責任をとれとの命が下るだろう。」

という偽り言を構成して都にいる親戚に密かに偽り告げました。その人は愚直にもその奸策を信じ込んで（小寺氏である。）且つ驚き且つ懼れて、密かに村にいる親戚（雪吹氏である。）に書を遣わして、この事を急告したことから生じたものであります。

第十三話 華山と華山

先生、華山の号は鷹見爽鳩の授けたものであります。その初め揮毫の筆や落款はみんな華の字を書きました。中年のころ以来（三十歳の頃と思われる。）五嶽華山の華の字は山字をつけた華の字でありますことを発見し、その後はその字体を用いると云います。

第十四話 泰然として

一指を動かさず

先生はかつて夏の日に主人三宅侯の客をもてなす席に侍ったことがあります。その時にわかには大雷雨となり雷鳴がすぐ近くを震わせました。満席の客人たちは恐れ戦き席に畏伏し、箸を投げ捨て杯を投げ出して殆ど生きた心地もしませんでした。先生は泰然として一指を動かすこともなく、心地よく爽やかそうな様子でありました。懐の中からおもむろに小冊子を取り出し、ある席の人が驚きうろたえる様を描き、それを以て笑いの道具にされました。(上田春洞の云うところであります。)

第十五話 紅の紙片

先生拘留中に獄吏が糾問の際に、先生が收拾するところの蔵書の中にラウレンス氏の地理志の日本無人島畧説の文中に紅の紙片を張ってあったのを責めて問い詰め、疑っていたことを吐かせようとなりました。先生は心えていました。「これは恐らくこの書を先に所蔵していた人のしたことでありましょう。」と。

獄吏もまた強いて罪を問いたたず事ができなくて終わりました。実は先生の貼付した紅の紙片(不審紙)でありました。その機智はまたこのようでありました。

第十六話 肥前の巨人

文政の頃肥前の巨人池月鯨太左衛門が江戸にやってきました。いろいろな人たちが招いて珍しい見物にしました。林述斎が池月を招き先生にその立像を描かせました。その顔つきや身体・手足ごとく長さを計り、全体を描きました。一時人々はその身体をえらく大きな見物としました。その後、幕府のご覧になるところになったということでもあります。私は、近ごろ古美術を楽しんでおりまして、その幅を広げて掛けているのを観てしきりに昔が追想され涙が流れました。

第十七話 師系と門人

先生はこの国の古い画の画風を真似て、よく狩野・土佐・四條の諸家の画風に倣い描いたものが多くあります。ある家の泥金の屏風一双に徒然草釜被り(徒然草第五十三段仁和寺の僧の鼎被りの話のこと)の図を描いたものは、土佐家の画風に

倣い最も絶品であります。今はその家に蔵していませんでしょうか、いないでしょうか。

先生は幼いとき画を金陵に学びました。(金陵は旗本大森氏に仕えていました。)後、文晁に従い又明や清の諸家の画法を身につけて一家を成しました。椿山先生、山口葛峯は皆先生と金陵門の学友であります。しかしながら、その技の遂に及ばないのを以て先生の門下生となつて学ぶ者であります。先生はいつも謂っていました。花や木や鳥やけもの画に至つては椿山さんに一枚負けていますと。錦谷の人物、靄崖・半香の山水は皆先生の門に出るものであります。

志賀氏が言っています。雲烟略伝の中には華山先生の事跡を載せているが尙遺したところや漏れたところがあるだろう。補習をお願いしたい。私は先生より十四歳も年少で、それ故に幼い時から見聞した先生の事跡を今追想して筆記するといつても、数十年を経て茫然となつて、その年月日や日時を忘れてしまいました。わずかにその幾つかを掲載してその責を塞ぐのみであります。

明治十四年秋日七十六翁三宅片鐵誌す

(文中の「華山」の「華」の字は、筆者に従つて「華」を使用しました。)

(研究会員 山田哲夫 訳)

田原町博物館 所蔵品から

重要文化財 渡辺華山筆

渡辺巴洲像画稿

文政七年（一八二四） 紙本墨画

縦九一・五cm 横五九・五cm



款記に「巴洲先生渡邊君小照」とあり、図右下に「柳町 大学様御寺 浄土法傳（伝）寺 水戸御寺 浅草 清光寺 駒込大乘寺、播磨様御寺極楽谷宗慶寺」とあります。側に刀を立て、端座する華山の父、巴洲の像を描いています。この画稿は田原藩の年寄役を勤めた巴洲先生こと定通が文政七年八月に六十歳で亡くなつ

たときに描かれており、この全身を描いた画稿の他に、四枚の下図が一幅に貼り交ぜられた掛幅も渡辺家に伝来しています。デスマスクと思われる二点があり、左を向いたものを縦眼を閉じ、斜め左を向いたものを縦に二図描き並べた図、斜め左を向いた図。完成作品に仕上げる段階的な作品として、墨のみで描いた顔に上

半身を描き添えたもの、顔面を彩色したものがあります。父が病没した際、華山自らが涙にむせびながら遺影を写し取ったものです。

この画稿は横継ぎの紙を縦に四段継いでいます。この画像の頭部は、縦二一・九cm、横一九・八cmの別紙を貼っています。この部分を別に数枚描き、その中から一枚を貼って完成させたものです。眉・目頭・目尻・小鼻・口元に淡墨のぼかしをつけ、陰影法の技法を使用しています。華山の写生を重んじる態度と肖像画を追求する迫真性は、例えば父の死という現実に向面しても、その生から死への一瞬をも見逃さずにとらえたのでしょう。

昭和三十年二月二日に他の遺品とともに、渡辺華山関係資料の一部として重要文化財に指定され、昭和五十三年三月二十四日に歴史資料に指定されました。

田原町博物館学芸員

鈴木利昌

華山史跡紹介

華山が見た田原(その一)

華山が田原へ来たのは一六歳、二六歳、三五歳、四一歳、四八歳の計5回です。このうち四八歳の蟄居期間を除けば四一歳の時は滞在期間(天保四年二月一日～四月二十五日頃)も長く、『全楽堂日録』、『客参録』、『参海雑志』にその記録が残されています。これらの記録は、近世の渥美半島の景観を記した点、為政者華山の田原への視線が知られるといった点でも貴重な史料と言えます。

これからの「華山史跡紹介」は、回を分けて、前述の史料に記された田原の姿を紹介していきます。

『全楽堂日録』には、領内を歩いた記録が二月五日(田原城～清谷橋)加治六甲～黒川原、前後の橋、高松富士見茶屋、赤羽根遠海番所、赤羽根の浜、池尻川、若見、越戸、和地村、和地村の浜、二月二日(船倉橋)神戸漆田、水川村、浜、谷ノ口、二月二日(北荒井)蔵王権現、衣笠山麓、滝頭、加

治山、二月二七日(仁崎)にあります。

この時には、何気ない田原の風景を次のように、印象深く記してあります。

水仙 「此地此草多し」と記しています。決して派手ではなく、寒さに

耐え凜として咲く姿は庶民から知識人にまで愛され、文人画の画題にも取り上げられます。華山は、滞在時に「水仙」の



池ノ原公園に咲く水仙
画も描いています。現在でも武家屋敷周辺の敷地境などに見られます。

赤土 加治の六田付近の記述に「土色朱の如し・皆火色をなす」とあります。渥美半島の大部分にこの鉄

分を多く含む赤色の土質が見られます。『参海雑志』でも「赤羽根」の地名の由来となったのは「赤羽丹(埴)」であると推測しています。

稚松、小松 黒川原、蔵王山南麓、水川村での風景です。未墾地の雑木は薪のためにいち早く伐採されます

が、酸性土壌のやせ地である渥美半島では、伐採後に生えてくるのは松

です。松は火付け用の葉、薪、建築資材にと利用価値は大きく、領民にとつては貴重な資源でした。松原は、

人の生活に密着していましたが、豊川用水の通水以降、耕地の拡大や生活様式の変化により、人と松とのつながりはなくなってきました。またマツクイムシ被害により松の美林が失われつつあります。

田原城から北荒井の間の風景は、特に印象深く記しています。

麦八青うしげり 桜八しろく

椿八あかく 竹のむらだちたる上

蔵王山秀たるさまいとよし



武家屋敷の柵

現在では麦を見ることが困難ですが、椿、竹、桜は田原城周辺でも見

ることができません。特に池

ノ原公園北にある武家屋敷の柵は見事ですが、華山が



華山記念碑

見たこれらの

景観は失われつつあります。何とか後世に残していきたいものです。

この一節にちなんだ記念碑が平成五年八月一日、田原町博物館北西角に建立されました。題字は小澤耕一氏によるものです。(次号に続く)

研究会員 小川金一 増山禎之

今回紹介した『全楽堂日録』は『渡辺華山集』(日本図書センター 一九九九)に全文及び解題が所収されています。



現在の竹のむらだちたる上の蔵王山
(写真撮影はすべてH12.3.7)

小園村 (神奈川県綾瀬市)

華山にとり、小園村を訪れ、三宅友信の生母お銀の安否をたたくことこそ、『游相日記』の旅の目的でした。そのためか、小園村訪問のくだりは圧巻で、お銀との再開の場面までは、勢いのある筆致で、一気に読んでしまつ面白さがあります。

今回は、『游相日記』に登場する綾瀬市の史跡を紹介します。当時、「小園といふ所は戸口にわつかに二三軒に不過」(『游相日記』以下同)という小園村は、現在では、団地や住宅が立ち並び、賑わいをみせてい



地蔵堂



お銀(右から二番目)清蔵(同三番目)の墓

ます。華山にちなむ史跡も数箇所あり、綾瀬市では、市内の文化財めぐりの一コースとして、全長約三キロの「渡辺華山とお銀さまコース」を設けています。

地蔵堂

「道の傍に地蔵堂あり。これを過くれば栗のいか立たる童のいと驚きたるおもゝちにて」

小園団地入口バス停の斜向かいにあり、小園村に至つた華山は、ここ

で偶然にもお銀の三男栄次郎と会い、清蔵(お銀の夫)宅への案内を乞います。

私たちが今回の華山・史学研究会の視察旅行の一行も、ここで綾瀬市の教育委員会の方にお会いし、案内をしていただきました。

お銀さまの墓

大川家を見下ろす小高い丘の上に大川家の墓所はあり、お銀の墓と清蔵の墓は、墓所の中央と思われるあたりに並んであります。清蔵の墓石には「飯寂欽法道喜居士」、お銀の



墓所より臨む清蔵家跡

墓石には「飯元閨外全修大姉」と刻まれています。

清蔵家・幾右衛門家

『游相日記』には、華山の筆で、当時の小園村の略図が描かれ、地蔵堂清蔵家、お銀の生家である早川村の幾右衛門家の位置が分かります。「幾右衛門よりは清蔵か家杜近けれ」というように、清蔵家と幾右衛門家は五百メートル程の距離です。

清蔵家は、明治三十五年に他所へ移つたため、現在はありません。その後、大川家(清蔵家)には相続者がなく、家は絶えたということですが、上の写真の中央に見える温室のあたりが清蔵家のあった所です。

幾右衛門家は、現在も存続しています。当時の建物こそないものの、広い敷地に立つ家屋からは、当時の豪農の様子がしのべれます。

昔話に花を咲かせ、時のたつのを忘れた華山は、名残を惜しむ清蔵家の人と小園橋で別れます。私たちも小園橋で綾瀬の人たちと別れました。

研究会員 柴田雅芳

紀行文 游相日記 (2)

その起蚕の方法は、特に異なることはないの
記さない。蚕は夕風を嫌う。海上からの風が桑畑
にはいれば、蚕に害を与える。恐ろしいことだ。
したがって思つたのは、沿海地方は養蚕に適して
いるところではない。しかしながら、糸を取るこ
とと、織ることは別のことのようにである。養蚕
と織りをいっしょにすることは不利である。し
たがって、八王子（武蔵国多摩郡八王子村＝東京
都八王子市）は機織りを専門にし、長鳶（長津田、
武蔵国都築郡長津田村＝横浜市緑区長津田）と鶴
間（相模国高座郡鶴間＝神奈川県大和市下鶴間）
は養蚕を専らにしている。

長鳶（長津田）の旅人、奥州を行脚した升五と
名乗る者が、乙二（俳人の岩間乙二）の弟子とい
うことでこの宿場に来て宿を願った。その人の風
采は、穏やかで誠実な人であり、書を好み、字を
よく知っているの、みんなが敬服している。お
互いに招いて客とした。一番多く升五を泊めた宿
の主人は、一度も（升五が）足を投げ出して座つ
たり、柱に寄りかかって座つたりするよつなこと

は見たことがない（ゆっくり休んでいるのを見た
ことがない）。（升五は）夜な夜な外出をして豪農
の家を探し、盗みに入っている。はなはだしいと
きには、自ら刀を持って、傲然と戸を破り、資材
を強奪し、それを拒む者は殺してしまった。

このことがわかったので、関八州の捕吏が偵察
し、捕まえようとした。しかし、どこにいるのか
わからない。そこで、升五を多く泊めた家の者は、
みな見覚役とかいうものになって、（升五の）居
場所を探した。自らいくらかの金を出して探した
という。これを隠罰という。

【三十二・三頁の上部に次のことを横書きしてい
る。】

（金井という所の代官、上倉禮助は画を好む。花
岳翁五命という。その花岳翁五命は、どれが名で
どれが号かは知らない。）

（長津田を）出て鶴間に着く。兎来が手紙を持
つて、長谷川彦八という豪農の家に行った。門や
塀の大きな家で、手紙を渡した。その家は、珍し
い客がたくさん来て、饗応が盛んであるという。
だから泊めてもらわなかった。角屋伊兵衛（通称
まんじゅうやという）に泊まる。四百三十二銭。

角屋は瀬沼氏。まんちゅうやは隣の土谷氏。華
山は両家を一軒と書いている。

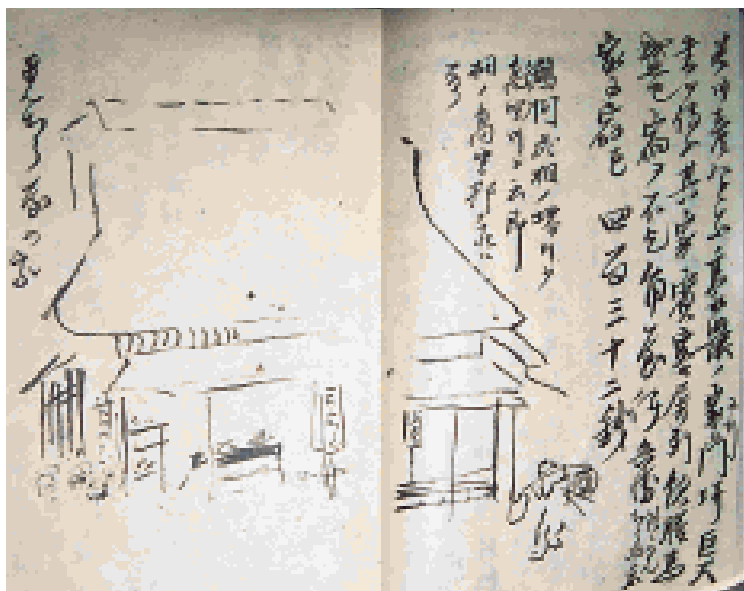
鶴間、武州相州の堺川を高坐川という。即ち相

州の高坐郡だからである。

鶴間という所は二カ所ある。一つが上鶴間（相
模原市）で、二つ目が下鶴間（大和市）である。
下鶴間は赤坂に至る。宿駅は少なく、わずかに一
十軒ばかりしかない。左りに松や竹が

蚕法 およそ蚕ははじめ掃おろしという。
鳥の羽を使い（雉子の羽根を用いる）本の紙につ
いたものを（以下省略）

まんじゅう屋の家



覆いしげり、大変、世間から離れた所である。まんじゅうやの主人夫婦は、萩 萩園ではないか、相模国高座郡萩園村。神奈川県茅ヶ崎市萩園という村で婚礼があり、出かけていていなかった。風呂の用意もできていなかった。食事もまずいであろうといい、(主人の)父である翁や孫娘だけであるが、それでもよろしかったら泊まっというきなさい、といった。酒を頼んだ。うまかった。飯もつまかった。

二十二日 晴

鶴間をたつた。

『此邊も又、桑柘多し。田圃の間に出れば、雨降山蒼翠、手に取るばかり。蜿蜒して一疇の中に連るものは、箱根、足柄、長尾、丹澤、津久井の山々見ゆる。耕夫壠に某々と教ふ。』

桑の大きな葉を作左衛門という。思うに、中国でいう柘のことであろう。尖った細葉の多いものを村山という。中国の桑である。養蚕を行う上で、桑が上であり、柘を下という。

鶴間原に出る。鶴間原は、縦十三里、横一里で柴胡(みしまさい)こという野草)が多い。したがって、柴胡の原ともいう。山々がいよいよ迫ってきた。

瀬谷村(相模国鎌倉郡瀬谷。横浜市瀬谷区)は、武州鶴間(武蔵国多摩郡鶴間村。東京都町田市鶴

間)の南にある。寺があり、妙光寺という。正中年間(一三三二―一三三四年)に鑄造した鐘がある。旧恩田村(武蔵国都築郡恩田村。横浜市青葉区恩田)万年寺の鐘であったものが、今はこの寺にある。昔、伊賀入道経光という人が恩田万年寺の寺主と掛け暮をした時に、この鐘を掛け物に出したところ、入道が勝って、鐘を自分の菩提寺の妙光寺へ移したという。伊賀入道の城址は、恩田にある。

小園村 大川清蔵の家



野原を過ぎて田畑の間を歩いて行く。大塚(相模国高座郡大塚村。神奈川県大和市大塚)、早川(相模国高座郡早川村。神奈川県綾瀬市早川)という所が近いので、(道で出会った人に)早川村の幾右衛門を尋ねた。

【四十・一頁に亘って、農家の屋内に男が二人座し、一人の女が配膳せんとする図を描く。華山と梧庵が、小園村大川清蔵の家を訪れたところである。女は町女(お銀)であろう。】

【四十一・三頁に亘って、農家とその前庭とを描いている。小園村大川清蔵の家をスケッチしたものである。】

幾右衛門は、酒に酔って川に落ちて死んだという。そうであれ、そのようなことがあっても、幾右衛門の家は今もあるかと問えば、知らないということであった。

『小園』といふ所に某娘行ておれりと聞。いかにと問えは、左に候、それは清蔵といふ百姓の妻になり、朝夕の煙細う立はかりのものにして、御殿様のいたり玉ふ所にはあらず。我等よくもしらねは、又行て問ひ玉ふへしといふ。』

大塚を越え、幾右衛門という者の家を探ねて、ついに柏ヶ谷(相模国高座郡柏ヶ谷村。海老名市柏ヶ谷)という所に出てしまった。この柏ヶ谷と云う所は、雨降道(雨降山へ行く道)と云って、

人も頻繁に往来する所であるが、戸数はわずかに四、五軒である。例えば、古寺の物寂しさと同じである。日陰にむしるを敷いて、背中を暖めながらうずくまっているおじいさんがいたので、また、幾右衛門の事を尋ねた。

この老人は、気乗りしない思いで、しばらく、何の返事もしなかったが、ようやく、早川というところは、この細道を入っていったところに村家

小園村 大川清蔵の家



があり、また、少し行くと川がある。それが早川という村だ。そのあたりに行つて、幾右衛門とお尋ねになれば、このあたりではよく知られた酒好きで老人で、もう八十歳にもなつたであろうか。その娘は、四人いたが、二人は江戸におり、姉の方は、早くから江戸に出て、宮仕えをしており、花を飾り、錦を着て早川に帰ってきた。

しばらくして、その娘の母が亡くなって、女ばかりの家になつてしまつたので、娘は、小園村（相模国高座郡小園村＝綾瀬市小園）の清蔵のところに行き、清蔵の弟の長右衛門という人を幾右衛門が養子にもらい、二女とその家督をついだのである。幾右衛門も清蔵もたいそう貧しい生活をしてきたが、どちらも大変な働き者で、清蔵の方は、村内はもちろんのこと、他村にまでも出かけて行き、人のために働き、いそがしく世を送っているのので、家での生業も思つようにはなつていないようである。

しかしながら、清蔵の家は、この村の旧家で、祖先を大川鞠負といつて、北条家の家臣ともいわれている。この村の兼子某といふ、昔、身分の高い武士で、早くから隠遁してこの村にやつて来ていた者がいたので、大川氏は、兼子氏を頼つて慕い来て、共にこの村に住つた。やがて早川村の長泉寺という寺を開き、豪農の聞こえも高かつた

ようである。紋は、軍配扇である。したがつて、小園村では、草分けの旧家であることを、ていねいに教えてくれた。

『幾右衛門が死せざるも、その娘のゆけるさきまで打きつて、いとく喜び、すゝみて細徑をたどり行、誠によはなれたる片いなかにて、都の空もおもひ出られて、何となう物かなしく、たゞ木くさの香ひたかく、冷風人をつつ。』

このようにしてゆくほどに、鶏犬の音が遙かに聞こえ、めしを炊く煙や麦を搗く音など、江戸ではめつたにない、めずらしい心地がして、また、嬉しくなつた。ただ、先を急いで、走りながら行つた。

『村落よき程に隔て、里の童むらかりあそへり。はしりよりて、幾右衛門（が）家はいつこそ、清蔵か家はいつこそと問えは、幾右衛門よりは清蔵か家杜近けれとことぶ。されはその家おしえよと、錢くれて導とす。』

道の傍に地藏堂あり。これを過くれは、栗のいか立たる童の、いと驚きたるおもうちにてたゞすめり。導く童か、これなん清蔵か子に侍るといふに、よく顔見れば鼻のわたりより眉毛の間にいたり、まこふへくもなき吾か尋る人の佛なり。家はいつこそと問ふに、いらへもせてはしり行。』

後を追つてついで行くと、その家についた。

なかなかゆつたりとした構えの母屋で、下家や木小屋が左に右に並び、ところ狭しと粟が干してある。犬や鶏が見守っている様子は、あの武陵桃源（秦代に乱世を避けた人たちが隠れ住んだという別天地）ともいうにふさわしい。

『椽のほとりに立てるものをこぶ。かしらに手拭をいたゞきて老さらほひたる女の、いつれよりにや、とおそるゝ問ふ。』

我こゝろに思ふやう、兒等は尋る人に似たれと、此女杜、姑にてもあるへし。されとも指を屈すれば二十年あまり、むかしのかたちにて、あらんやうもなければ、顔打まもり、とみこつ見するに、耳の下に大きやかなる疣あり。』

これはまさに、まきれもない尋ねる人であった。『さて我、童なりし時、御身にいと憐にあつかりたる者なり。いさゝか其恩を報んために、厚木迄いたるを、道を迂してこゝ迄は尋ねいたれり。我面かけはたれに似や、御考候へ』

といえは、尚おそれにおそれ、

左様なる事は我が身に覚え侍らす、御殿様にはいつ方より到り玉ふや、もしや人まちかえにてもありぬらんといふ。

左にあらず、御身の名は何と申やといえは、我名は町とよへり。むかしの名は何といふやといえ

は、町とこいふ。』

こゝ答へられて、これはやはり人違いであつたかどたいその面目もなく、はずかしく思い、心に疑つたが、いずれにしても、ただ、耳の下の疣こそ証拠なので、お銀と申したこともあつたのではないかといえは、また、たいそう驚いた様子で、『むかし江都にありし時は左もよひし事あり。』

小園村の略図



さあれば、君は麴町よりや入来り玉ふやと、はじめにかはりたる顔にて、まつ奥の方に入玉えといえと。』

皆板敷きの間で、畳はない。花筵を取り出してこれを敷き、これに席を設けた。そうして頭にかぶっていた手ぬぐいを取ると、間違ひなくその人であつた。ただ涙にむせいで、お互いに問ひ答へることもなく時を移した。

『さて、我は何と申名に候や、御覺候かといふ。』

されは御前には、上田ますみ様にても候や。さにあらず、これは十五六年もさきに、よの外の人になりたり。

さすれば渡邊登様に候へし。いかゝの故にて御尋被下候や。さて夢にてもあるへし。けふは我おつと、さりかたき用ありて未かえらす。これは二男にて幸藏十九と申。これは女にて、もと十一歳、榮次郎八歳、これはさきに導きたる童なり。留吉三歳、皆一同につらなり拜をなす。』

(続)

研究会員 加藤克己

渡邊家の家紋と家系

華山の先祖は、田代図書と称し、越後家で八百石の武士であったが、故あって浪人しており、その子息、権右卫門定重が寛文四年田原藩主、三宅康勝公に百石五人扶持にて仕え

ることになった。その時母方の苗字である渡邊を名乗って仕えた。「のちに三百石以上二も相成不申候者、本苗田代ヲ名乗り申問敷との申伝二候也」と華山の父市郎兵衛定通が藩に差出した自筆の「渡邊氏家系」に書かれている。

にいるウニを真上より見て図案化したと言はれている。替紋としては、五三ノ桐を使用し、明治になって華山の子息小華が作った家紋を替紋として使用されている。

渡邊家家紋

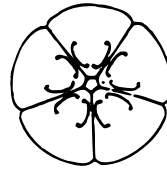
田代氏の家紋を使う定紋
兜申



替紋
五三桐



小華先生が作られた家紋
現在替紋として使用

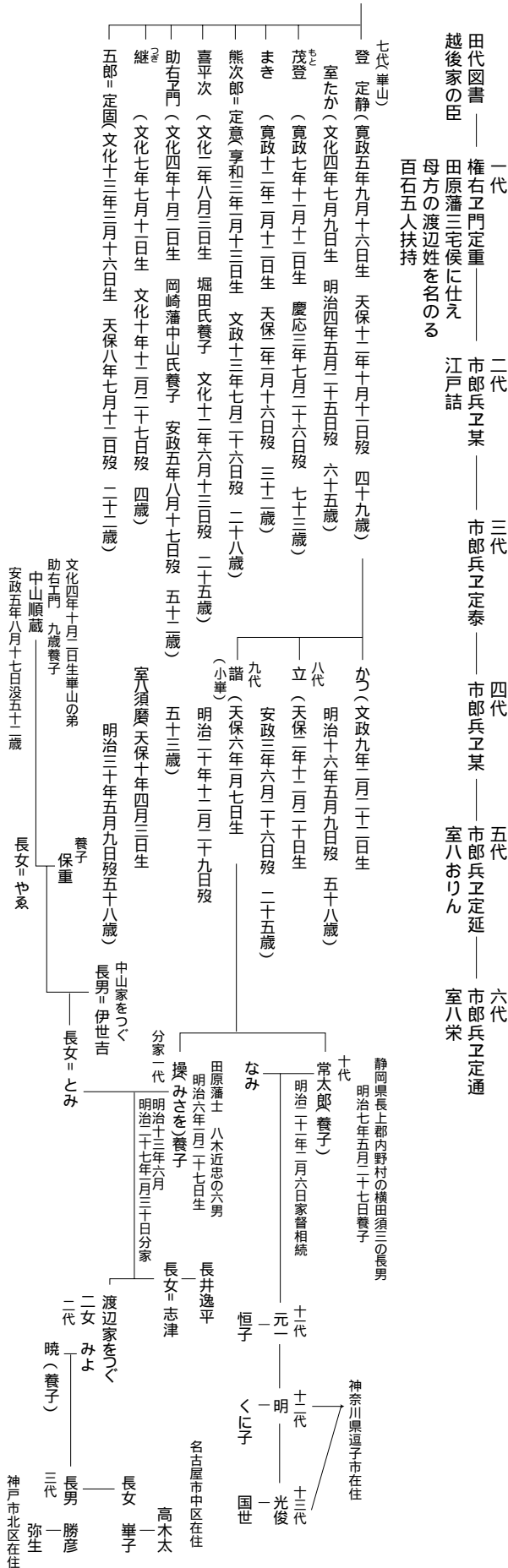


家紋は、定紋として田代家の「兜」紋を使用している。この紋は海

一般には、渡邊氏の家紋は、三ツ星にぼういち、一渡邊星、二渡邊星、三丸に渡邊星がある。

理事 加藤寛一

渡邊家系図



華山・まなびの原点

研究会員 小川金一

華山・史学研究会が発足した平成元年、加藤寛二氏(現在、文化財課・調査員)の勧めもあり、発足当時からこの研究会に参加させていただいています。毎月開催される定例の研究会には、行事や仕事が重なる事が多く、参加できない日々の連続で、年数は重ねたものの、先輩方々や熱心な研究会員の皆さんの足元にも及びません。

私の渡辺華山・まなびの原点は、今から二十年前、東京での大学生生活の中からでした。

そのころの私は、農学の中でも、遺伝や育種に興味があり、遺伝育種学研究室に所属しておりました。あるとき、農業先進地、渥美半島を視察研修することになり、研究室員や教授などは、田原町出身の私に、当然の如く質問を投げかけてきます。その問いかけは農業分野に留まらず、文化、歴史と幅広い分野に渡りました。話題が渡辺華山に及んだと

き、赤面した事を覚えています。

それは、田原町出身の私よりも、他県の学生や、教授のほうがより詳しく華山を語り、農政学者大蔵永常が天保五年九月に田原藩に雇われた事や、華山が来るべき飢饉を見通して、領民救済に備え「報民倉」の建設を田原藩主康直侯に願ひ、この許しが出て、天保六年に領民の勤勞奉仕により、総日数六十六日余で田原城の東南外濠に二棟六十坪を完成させたことまでも知っていたからでした。

このような事もあり、狼狽を繰り返したくない思いと同時に、自信を持って郷土を語れるように華山・史学研究会で字ばせていただいています。

現在は、インターネットで簡単に情報の受発信が出来る時代です。しかし、情報が溢れすぎ、正しい情報を見極める能力も必要な時代ともいえます。このような時代だからこそ、会の様々な研究活動や正しい情報を、華山ゆかりの田原から積極的に発信したいと考えます。そのためにも若い皆さんの参加が必要です。

華山先生について

田原中部小学校
六年 齋竹興祐

華山先生の名前はよく聞きますが、くわしいことはよく知りませんでした。しかし、社会の授業で、華山先生のことを調べていくと、今まで華山先生が何をしてきたか、どうして切腹をしてしまったかなどが、くわしくわかってきました。

華山先生が親などにめいわくをかけないようにするために、自殺したという文章を読んで、とても残念に思いました。華山先生がもつと生きていれば、もう少し早く戦争が終わり、人々が安心して生活できる世の中になったかもしれないと思つたからです。

華山先生は切腹をする時、こわくなかったのだろうか、自分は死ぬ決意をして満足できたのだろうか、ということなど、疑問に思うことがたくさんあります。

モリソン号事件という日本人がかんちがいをして、米国船を追いかけたという事件で、華山先生が幕府を批判したことから、その勇氣や行動力におどろかされました。

さらに、慎機論という本を書いて同じように幕府を批判したことを知りました。

華山先生は、家のびんぼうを救うために画家の勉強、蘭学者になるための勉強、儒学という中国の学問の勉強など、いろいろなものを学びました。とても頭のいい、まじめな人もあります。

華山先生のことを調べていくと、新しいことがどんどんわかってきて本当にいろいろなことをやった人だと思えました。

ぼくは、これからも華山先生のことを調べていき、華山先生のすばらしさをみつつけていきたいと思います。

田原町博物館から
ご案内

企画展のご案内

四月二十六日～六月十一日
平成十二年春の企画展「新収蔵
品展 渡辺華山とその門下の魅
力」(企画展示室1・2)



渡辺華山筆

八仙人之図(天保六年)

九月九日～十月十一日
平成十二年秋の企画展 没後一
六〇年「谷文晁展 若き日の憧
憬」(企画展示室1・2)

平常展のご案内

四月十八日～六月四日
渡辺華山と師・友(特別展示室)

六月六日～七月三十日

渡辺華山と師弟「春から夏へ」

(特別展示室)

六月十四日～七月三十日

芝村コレクション 陶磁器

(企画展示室1・2)

八月一日～九月二十四日

渡辺華山と椿椿山・福田半香

(特別展示室)

八月二日～九月六日

渡辺小華と鍋木華国・井上華陵

とその周辺(企画展示室1・2)

九月二十六日～十一月十二日

渡辺華山と椿椿山を中心に(特
別展示室)

企画展時

4月26日～6月11日

9月9日～10月11日

観覧料 一般三〇〇円(二四〇円)

小中生二〇〇円(八〇円)

平常展時

6月14日～9月6日

観覧料 一般二〇〇円(一六〇円)

小中生二〇〇円(八〇円)

()内は二十名以上の団体の料金

毎週月曜日は休館

4月25日・6月13日・9月7・8日

は臨時休館

田原町博物館友の会会員募集中

申込場所 博物館受付

入会申込書に十二年度分会費千円

を添えてお申し込みください。

特典

視察研修に

参加できま

す。

博物館だよ

りを郵送し

ます。

展覧会・催

し物のお知

らせ

ボランティア

ア活動



(財)華山会から

華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館

毎月第四土曜日研究会

視察研修に参加できます。

華山会報第四号

平成二二年四月一日発行

編集発行 財団法人華山会

理事長 白井孝市

事務局長 中神洋一

千四四一―二四二

愛知県渥美郡田原町田原巴江二の一

TEL 五三二・三三・一七

FAX 五三二・三三・一七一

編集・協力

田原町博物館

華山・史学研究会

会長 渡辺百祥

林 和彦 尾川新一

山田哲夫 我部山正

林 哲志 小川金一

柴田雅芳 増山禎之

加藤克己 中神昌秀

仲井千恵

華山会報ご希望の方は華山会館・

田原町博物館にお申し出下さい。

次回発行予定二二年一〇月二日